

鑑賞力の可視化 —書道Ⅱ、ES 書法表現での作品制作において—

奈良県立奈良高等学校 古本浩子

I.はじめに

学習指導要領の解説に、「書に関する見方・考え方」について、「感性を働かせ、書を、書を構成する要素やそれらが相互に関連する働きの視点で捉え、書かれた言葉、歴史的背景、生活や社会、諸文化などとの関わりから、書の表現の意味や価値を見出すこと」とある。「書の表現の意味、価値を見出すこと」は、日常生活で書に関わる機会があってこそ可能と考えられるが、その機会が減ってきている生活様式では難しい課題になっている。日頃の生徒の活動の様子から、書理解のためにこれまでよりも基本的かつ具体的なアプローチが必要ではないかと考え、そのためのきっかけになる取組をしたいと考えた。

II.これまでの生徒の活動の様子

1. コロナ禍での取組

筆者は本校勤務4年目である。着任してすぐ、コロナ感染症のため自宅待機となり、自宅学習の課題を出した。身の回りにある「手書き文字を探そう」というテーマで、手書き文字の特徴をレポートする内容だった。2年生対象の課題だったにも関わらず、予想に反して手書き文字を見つけられる生徒が少なかった。多くの生徒が活字を抜き出していた。この内容の課題は以前から機会があれば出してきたが、それ程難しいと感じたことはなかった。しかし、生活の中に手書き文字が減っている現状から、活字と手書き文字を判別することが、本校生徒にとっても難しい課題になってきていることを感じた。

2. 1年1学期の楷書学習

例年、1年生1学期の楷書学習の終わりに、各自の好みの書風（書きやすさ、見た感じ）を尋ねると、常に「孔子廟堂碑」が人気となる。その理由は、「普段見ている字形（活字）に近いから」という理由が多い。以前は顔真卿の楷書にも票が集まり、明朝体の元になった書家の楷書であると伝えると生徒も納得していた。しかし現在、活字中心の生活や学習活動のため、手書

き文字やさまざまな書風を見る機会が少なく、その良さを理解しにくくなっているのではないかと思われる。生徒にとって特徴のある古典作品は、見慣れない特異なものとして目に映るようである。

III.今年度の1年生の授業の様子

今年の1年生は、中学時代をコロナ禍で過ごしたためか、色々な場面で、経験不足であることを感じる。それが、書道においてもいくつかあった。

1. 鑑賞の授業

9月に、奈良教育大学大学院生の佐藤允治先生が鑑賞の授業を5時間で展開した。本校ではこれまで鑑賞のみの独立した授業は行っておらず、展開を興味深く見守った。題材に、野口シカが息子野口英世に宛てた書簡や、夏目漱石の各年代の書作品を使い、書に盛り込まれた思いや時代背景を読み取るというものであった。しかし、この授業でも、残念なことに、生徒たちが書作品を理解できない、つまり、見たことのない草書の書簡を鑑賞しても良さが分からないために、感想がなかなか出なかった。手書きの手紙に込められた思いや歳を重ねるごとに変化する書風など、まだ楷書を少し学んだだけの生徒には難しすぎた。佐藤先生とは、1年生でなく2年生以上で展開するともっと違った展開だっただろうかと反省した。

2. 2学期末の作品制作

生活に生かす作品の制作でA4クリアファイルに好みの言葉を書く授業を進めた。制作のために、自分で選んだ言葉を字書で調べた。しかし、これまでにない事象が起こり驚いた。紙の字書を引く経験が極端に少ないこともあるだろうが、抜き出した文字が、古人の文字ではなく、見出しの活字を抜き出す生徒が多数いた。パソコンや携帯の利用度が高く、手書き文字と活字の区別ができないか、または活字が一番美しいと感じているようだった。

3. 蘭亭序のレポート

2学期に行書学習を進める1年生に、王羲之の「蘭亭序」の一字をレポートさせた。漢字の持つ意味ではなく、造形的に選択するように指示した。このレポートも毎年取り組む内容だが、今年レポートの中に、「日頃見慣れない行書から文字を選ぶこと自体が違和感でしかない」という表現があった。多くの生徒が「楷書体に近く分かりやすい」という点を選択の理由に挙げていたのも、大きな変化を感じた。これまでは、古人の作品を手本として学ぶ臨書を当たり前としてきたが、生徒には、見慣れない文字を書くことがストレスにもなっているようである。

入学した1年生に中学校での書写についてアンケートをすると、国語の授業中の書写の内容はこれまでと変わらないように思われる。書道教室に通っていた経験者の割合も3割程度で数年大きな変化はない。本校には、高校生の間も手習いを継続している熱心な生徒が一定数いる。そこだけ見ると、書に関する環境に変化はないように思われるが、普段の生活での手書き文字との触れ合いがなくなっていることが、書に対する馴染み、愛着、造形を楽しむ鑑賞する心を育めずにいるのではないかと考える。手紙を書くこと、手書きで年賀状のやり取りをする習慣が減り、タブレット端末や携帯電話の利用で自ら手で文字を書く機会が減っているのが現状である。

一方、2年生で継続して書道の授業を選択する生徒は、実習を重ねていく中で、各自が好みの分野を選択し、古典や題材を自由に選び、半切サイズ制作活動ができるように成長している。このことから、2年生の書体や書風に対する理解と、書への興味につながる鑑賞力を可視化することで、昨今の現状を考察する入り口としたいと考える。

IV. 本校の書道の授業講座編成

本校では、1年生で必修芸術Ⅰを選択しており、毎年100～120名の生徒が書道Ⅰを履修する。1年生では漢字の五書体、仮名、漢字仮名交じりの書の3分野の基本を均等に学んでいる。2年生では文系生徒が芸術Ⅱを選択でき、10～30名程度1講座、文系理系両方からES書法表現(学校設定科目)選択者20名程度1講座が開講される。3年生では、文系理系から探究書道(学校設定科目)を選択でき、3～9名の履修者がいる。

V. 二年生の授業の内容

ES書法表現には、書道Ⅰを履修していない生徒もいるため、1学期は履修の有無の差をなくせるよう、配慮を盛り込んでいる。課題を選択できるようにし、その中で五書体、三分野を広く理解できるようにし、未履修生徒の書くことへの不安をなくすようにしている。

1. 半切制作

1学期後半に書道ⅡとES書法表現の両方で半切の作品制作にあたる。その作品は高等書範※の昇級試験に出品し、希望者は「日本学書展」(全国的な書道コンクール)にも出品する。3学期には仮巻きに仕立て「市展なら」に出品の予定である。まず、好みの分野(漢字、仮名、漢字仮名交じりの書)の選択をする。漢字は臨書、仮名は大字仮名、漢字仮名交じりの書は創作となる。作品サイズが半切と大きいため、サンプルを見せ、漢字選択者は古典を選び、書きたい部分を選ぶ。更に2行書き又は3行書きかを選ぶ。仮名と漢字仮名交じりの書は、書きたい和歌、詩を撰文する。半切サイズでの仮名は授業時間の都合上、大字仮名になる。これまで全く学習していない大字仮名は昨年までは選択肢から外していた。しかし、今年は4月のオリエンテーションで仮名の取組の希望が多かったため、大字仮名も選択肢に入れてみた。すると、漢字24名、大字仮名10名、漢字仮名交じりの書3名となった。大字仮名の選択者が予想以上に多かった。流麗な仮名を好み、未体験の大字仮名へ興味があることはとても喜ばしいことと感じた。漢字は教科書とそれ以外の法帖も資料とし、五書体から自由に選ばせた。篆書と草書の選択者はいなかったが、選んだ書風に偏った選択は見られなかった。24名で19名の古典が選択され、楷書体13名、行書体7名、隸書体4名だった。

この時点で、1年時の基本的な学習が身につけていけば、自分の好みや力量を理解し、表現したいものを選択できるだけの鑑賞力がついていることがわかる。

※高等書範とは…奈良県高等学校書道教育研究会主催で、高等学校の書道教員が作成、発行している競書冊子である。毎学期1冊、年間3冊の発行で、生徒は年間4回の出品をする。書道Ⅰ、書道Ⅱ、書道Ⅲ(学校設定科目も可能)の学年ごとに3分野の課題が掲載されており、各学校で取り組む課題は自由に選択できる。

2. 扁額作品の取組

1 学期後半から 9 月末まで、半切作品を書き上げた後、11 月に高等書範 2 号課題に取り組む時期が来る。今回は、2 号の漢字課題に取り組む中で、夏の半切作品に選んだ古典との関係性が見られるのかどうかを確認する。そのために、書き進める中で感じたこと、なぜその書風を選んだかを言葉で表現させ、書体や書風への理解度を可視化する。更に、扁額作品を制作後、2 号の仮名と漢字仮名交じりの書の課題のどちらかを選択させ取り組む。最終的に高等書範に出品した作品がどの分野であり、半切作品の選択と同傾向にあるかどうか確認する。

3. 扁額漢字課題について

今回の高等書範 2 号漢字課題は、1/8 画仙紙(17.8 cm × 68.5 cm)横長「情慮肅」の三字、書体自由である。字数は少ないが、右から左に書き進み、文字の中心を揃えながら紙面にバランスよく配置することが難しい。生徒の選択幅が広がるよう、手本となる参考作品の種類をいつもより多く 13 種類を準備した。

表 1. 参考手本の書風一覧

1. 楷書 1 牛橛造像記(北魏)
2. 楷書 2 宣示表(魏)
3. 楷書 3 九成宮醜泉銘(唐)
4. 楷書 4 顔真卿多宝塔碑(唐)
5. 行書 1 智永真草千字文
6. 行書 2 米芾(北宋)
7. 行書 3 王鐸(明末～清)
8. 草書 書譜(唐)
9. 隸書 1 乙瑛碑(後漢)
10. 隸書 2 鄧石如(清)
11. 隸書 3 楊峴(清)
12. 篆書 1 金文(殷、周～秦漢)
13. 篆書 2 小篆(秦)

4. 扁額授業の展開

4 時間～5 時間を設定した。まず、扁額の特徴と制作にあたっての注意点を説明してから手本を選ばせた。いつもと異なる形式と手本の多さに最初の手本を決められない様子だった。今回の制作にあたっては、プリントを配付し、毎時間①手本を選んだ理由(視覚での選

択理由)と、②書いた後の感想(実技を伴う評価)を書くことを課題とした。手本は自由に交換しながら、各自の書きやすい書風、表現としてより効果的に書けるものを見つけるよう指導した。いろんな書体、書風にチャレンジする場合もあれば、一つの書風に繰り返し取り組む者も見られた。毎時間提出する作品にコメントを付けて返却し、生徒は次時にそれを読んで実技に取り組んだ。

5. 2 号の漢字仮名交じりの書と仮名の課題について

漢字仮名交じりの書は、1/8 画仙紙にブルーストの言葉、仮名は、短冊に松瀬青々の俳句が課題であった。作品例を示し、どちらかを選ばせた。高等書範 2 号用に作成した 2 点に押印し、好みの 1 点を最終的に選ばせ出品券を貼り出品した。

VI. 2 年生の取組から見えること

表 2. 制作過程で選択した分野と古典の一覧

A半切作品の選択分野と古典		B扁額作品に選択した書風				C漢字仮名交じりor仮名	高等書範の出品作品
楷書体	王羲之尺牘	草書体	多宝塔碑	多宝塔碑		仮名	仮名
	皇甫誕碑	乙瑛碑	多宝塔碑	金文	多宝塔碑	交	漢字
	孟法師碑	智永真草千字文	智永真草千字文	多宝塔碑		仮名	仮名
	孟法師碑	草書体	乙瑛碑	金文		仮名	仮名
	雁塔聖教序	造像記	多宝塔碑	多宝塔碑		交	交
	司馬晒墓誌銘	造像記	鄧石如	鄧石如	鄧石如	交	交
	司馬晒墓誌銘	造像記	鄧石如			交	漢字
	多宝塔碑	造像記	多宝塔碑			交	交
	多宝塔碑	多宝塔碑				交	交
	☆ 元槿墓誌銘	宣示表				仮名	漢字
		造像記	九成宮醜泉銘			交	漢字
	蘇孝慈墓誌銘	宣示表	造像記	多宝塔碑	多宝塔碑	交	漢字
	智永真草千字文	九成宮醜泉銘	王鐸行書	多宝塔碑		仮名	漢字
行書体	孔子廟堂碑	智永真草千字文	多宝塔碑	多宝塔碑		交	交
	蘭亭序	智永真草千字文	智永真草千字文			交	交
	争坐位文稿	米芾	米芾			仮名	漢字
	集王聖教序	米芾	宣示表	智永真草千字文	智永真草千字文	仮名	仮名
	集王聖教序	智永真草千字文	智永真草千字文	智永真草千字文		交	漢字
	集王聖教序	智永真草千字文	王鐸行書	米芾		交	交
隸書体	温泉銘	王鐸行書	米芾	米芾		交	交
	乙瑛碑	鄧石如	鄧石如	楊峴		仮名	仮名
	曹全碑	宣示表	宣示表	宣示表		仮名	仮名
	礼器碑	乙瑛碑	鄧石如	楊峴	九成宮醜泉銘	仮名	漢字
漢字仮名交じり文	史晨後碑	多宝塔碑	多宝塔碑			交	交
		多宝塔碑	小篆	宣示表	米芾	交	交
仮名		宣示表	多宝塔碑	多宝塔碑		仮名	仮名
		米芾				交	漢字
		多宝塔碑	米芾	米芾		交	交
		鄧石如	楊峴			仮名	仮名
		智永真草千字文	九成宮醜泉銘	九成宮醜泉銘		仮名	漢字
		造像記	宣示表	九成宮醜泉銘		仮名	漢字
		多宝塔碑	智永真草千字文	草書体	多宝塔碑	仮名	仮名
		九成宮醜泉銘	多宝塔碑	多宝塔碑		仮名	漢字
☆		多宝塔碑	多宝塔碑	多宝塔碑		仮名	仮名
		造像記	造像記			仮名	仮名
		米芾	鄧石如			交	交

表2は、生徒の取り組んだ内容を左から時系列に並べた一覧である。

A半切制作の欄には、書道ⅡとES書法表現の両講座を併せて、同じ書体や古典を選んだ者同士を併記した。☆印の二名は、書道Ⅰを履修していない生徒である。その次の取組、B扁額作品では、選択した手本の書風を表の左から並べて記した。作品と感想プリントを添えて提出された回数が多い者で4時間分あった。(少ない者は欠席又は提出忘れなど)継続して同じ作品に取り組む場合もあり、その場合は同じ古典名が並んでいる。更にその後、高等書範2号の2点目の取組として、漢字仮名交じりの書か、仮名のどちらかを選択したものがC欄である。そして、一番右欄は、高等書範2号に出品した作品分野を記載した。

①.Aで漢字の臨書をした者は、Bでも同じ書体を選ぶ傾向にあるが、複数の書風に挑戦していることが分かる。楷書体では多宝塔碑での清書が多く、行書体では智永千字文と米芾が半々であった。隸書体では書風の違いを書き比べ、書きやすいものを探っているが、最終的に楷書で清書した者が、4人中3人いた。この内容から、漢字の取組にも、書体や書風の偏りが無いことが分かる。

②.Aで漢字仮名交じりの書、又は仮名を選択した者(12名)はBにおいて楷書体で清書した者が7名だったが、制作過程で、普段取り組みの少ない小篆や草書にも挑戦している。固定の書体書風に固執せず、筆法の違いを試していた。

手本を交換する場面では、しばらく手本を眺め考え込む生徒が多くいた。この悩む時間が、目の前の複数の手本の書風を比較し、自分の得意な筆使いにマッチするのかを判断する鑑賞の瞬間であり、とても大切な活動だと捉えている。選んだ書風を実際に書いてイメージと合致するのかどうか。臨書を繰り返しながら、古典の特徴を追体験して、筆法の理解を深めていくと同時に自分の好みや技量を確認していると考えている。

③.Cの選択は、漢字仮名交じりの書18名、仮名が18名と全体では同数だったが、Aで仮名を選択した9名のうち、漢字仮名交じりの書2名、仮名7名だった。普段から仮名を好む生徒は、繰り返し仮名に取り組む傾向にあるが、最終的に出品に選んだ作品は、漢字が3点、漢字仮名交じりの書が2点、仮名が4点と偏りが見られなかった。このことから、生徒の好みの分野

が作品を選別することに影響していないことが分かる。今回の高等書範の課題は扁額や短冊で、いつもと違った形式であったため、紙面構成(文字の配置)が難しく、落款を含めた作品効果に配慮し、第三者の審査においても良い評価が得られるよう、より完成度の高いものを作ろうとしていた。例えば仮名では、紙の種類の違いによる書き味を比較する、または色のついた料紙に映える墨の濃さを試すなど、個々に丁寧に試行錯誤しながら制作に励んだ。互いの作品の意見交換をする様子も見られ、各自の作品の出来具合を見極めての作品選びになったと考える。

④. 今回の作品制作の選択分野を追ったことで、3分野、書体、書風を広く鑑賞した上で作品制作に取1組み、各自の作品を評価、選択をしていることが分かった。

VII. 今後の課題

2年生では例年と変わらない取組ができ、3分野(漢字、仮名、漢字仮名交じりの書)の得意な分野に偏ることなく、完成度を上げる工夫を凝らし実技に取り組んでいる。しかし、1年生では、書体の区別や書風を味わうまでの知識や経験が少ない生徒が大半を占めるため、鑑賞の力不足で臨書学習を進めにくくなっている。1年生の鑑賞力を高めるためには、多くの作品を見比べること、観察すること、自分の言葉で表現すること、これらの時間を多く取る必要がある。①教科書のコラム(歴史上の人物の作品)など、鑑賞できるページの利用、②実用書の学習(手紙、はがきの書き方)で、楷書と行書の理解を深める。実用書の現物の鑑賞③作品制作の後の相互の鑑賞、又は鑑賞会の設定。これらの取組には、感じたことを言葉で表現する課題を加え、理解度を明確にしたい。

VIII まとめ

2年生で選択する生徒は、選択しない生徒より興味を持つ者であり、元々鑑賞の力があつたともいえるが、2年次により多くの追体験(臨書)を繰り返すことで古典への理解が深まっているのは確かである。書を味わいながら実技を楽しむ姿は真剣であり、書き上げた時の大きな深呼吸は、達成感の表れだと思う。

1年の履修のみで、2年以降書道を選択しない生徒たちにこそ、書体を見分ける基本的な知識や、自分の名前を楷書と行書で書き分けられる程度の技能を身につ

けてほしい。社会に出て、筆を持つことはなくても、文字の造形に付加される美を感じる余裕を持ってほしい。そのために、より基本的な内容から始め、書
の美しさを楽しめる観察力を身に着けられるよう、今後も鑑賞力を高める授業の展開を実践していきたい。

（受付：2024年1月9日 受理：2024年3月1日）